子どもの不安傾向に関する発達的研究

中村 多見

A developmental study of children's anxiety

Tami Nakamura

本研究の目的は，子どもの不安傾向について発達的に検討することであった．小学４年生から中学３年生1176名（男子605名，女子571名）を対象に，田研式不安傾向診断検査を用いて調査を行った．その結果，学年間の比較では，全体的な傾向として，小４から小６にかけて低下し，中１と中２で上昇し，中３にかけて再び低下した．男女間の比較では，学習不安傾向，対人不安傾向，過敏傾向，身体的徴候，恐怖傾向，衝動傾向において女子が男子よりも有意に高く，特に恐怖傾向では顕著な性差が見られた．不安反応（過敏傾向，身体的徴候，恐怖傾向，衝動傾向）に対する不安対象（学習不安傾向，対人不安傾向，孤独傾向，自罰傾向）の影響について検討したところ，対人不安傾向と孤独傾向は４つの不安反応に対して大きく影響し，その影響の仕方には学年と性別による違いが見られた．

キーワード：不安対象，不安反応，発達的研究

問　題　と　目　的

近年，子どもの不適応行動が増加の傾向にある．総務庁青少年対策本部（2001）によれば，中学生の不登校者数は増加の一途をたどっており，校内暴力やいじめの発生率は中学校において極めて高く，一時に比べて鎮静化しているものの，ここ数年は漸増傾向にある．

中学生の不適応行動の１つであるキレ行動に関して，神藤・伊藤・斉藤・柳原・久木山・西田・奥田（1999）は生活ストレッサー経験とストレス反応の視点から検討した．その結果，「抑うつ・不安」や「怒り・不機嫌」といった情動的ストレス反応とキレ行動に関連があることを見出した．また，岡田（2000）は，中学生を対象とした学校ストレスに関する研究において，攻撃，無気力，依存，引きこもりは，学業や友人関係といった学校ストレッサーによって直接引き起こされるのではなく，不安や怒りなどの情動的ストレス反応が高まってはじめて生起する二次的な反応であることを確認した．これらの研究から，子どもの不適応行動には情動的ストレス反応が関連していると考えられる．情動的ストレス反応には，「抑うつ・不安」や「怒り・不機嫌」がある．その中でも，不安は子どもの将来への展望の欠如や，行動の攻撃的傾向，衝動的傾向，短絡的傾向，神経症傾向と関連があるのではないかと示唆されている（松尾，1984）．

また，不安は時代や年齢，性別によって変化するものであることが報告されている．例えば，松尾（1984）は，子どもの不安が過去に比べて高まっているのではないかという仮説から，田研式不安傾向診断検査を用いて昭和34年と昭和58・59年の小・中・高校生の不安傾向を比較検討した．総不安傾向を年代比較したところ，昭和58・59年の得点は昭和34年に比べ，小４から高２の各学年において有意に低下しており，仮説とは異なる結果が得られた．そこで，下位尺度別に年代比較をした結果，すべての下位尺度において小学段階では顕著な得点の低下が見られたが，中学段階ではあまり顕著な低下は見られなかった．逆に，中２の過敏傾向と衝動傾向は，昭和34年に比べて上昇していた．このことから，松尾（1984）は，子どもの不適応や問題行動を不安傾向の視点から解明しようとするならば，小学段階から中２ごろにかけての変動がひとつの手がかりになるのではないかと示唆している．また，藤岡・稲岡（1986）は中学生の不安傾向を学年別，性別に比較検討し，不安傾向は学年の進行とともに高まり，女子が男子よりも高い不安傾向を示すという結果を得ている．以上のことから，今日の子どもの不適応行動を理解し対処する際，子どもが不安を感じる対象やそれによって引き起こされる反応を年齢や性別を考慮に入れて検討することが必要であると思われる．

本研究の主な目的は，不安感情の向けられる対象と不安によって生じる行動の２面から開発された田研式不安傾向診断検査を用いて，小学４年生から中学３年生の子どもを対象に，日常生活の中で生じる不安傾向を発達的に比較検討することである．

方　法

調査対象

兵庫県内の公立小学校と公立中学校に在籍する小学４年生から中学３年生の合計1242名を対象に調査を実施した．このうち回答に不備のあった者を除いた小学４年生175名（男子93名，女子82名），小学５年生180名（男子99名，女子81名），小学６年生199名（男子97名，女子102名），中学1年生239名（男子120名，女子119名），中学２年生200名（男子104名，女子96名），中学３年生183名（男子92名，女子91名）の合計1176名（男子605名，女子571名）を分析の対象とした．

調査時期

調査は2000年９月上旬から10月中旬に行った．

田研式不安傾向診断検査

この検査は，小学４年生から高校３年生を対象とした診断検査で，個人の不安傾向を「1.不安感情の向けられる対象（以下，不安対象）」と「2.不安によって生じる行動（以下，不安反応）」の２つの側面から捉えようとするものである．

不安対象は，次の４つの下位尺度から構成されている．①授業やテストでの失敗など学習についての不安を測定する「学習不安傾向（15項目）」．②他人との付き合いに対する失敗への予感の程度を測定する「対人不安傾向（10項目）」．③人を避けようとする欲求と仲間として認められたいという欲求

の葛藤から生じる不安を測定する「孤独傾向（10項目）」．④自己の行為に対する漠然とした恐れを測定する「自罰傾向（10項目）」．他方，不安反応は，次の４つの下位尺度から構成されている．⑤神経症的な傾向を測定する「過敏傾向（10項目）」．⑥病気や身体的欠陥などについての不安を測定する「身体的徴候（15項目）」．⑦不合理な恐れに対する傾向を測定する「恐怖傾向（10項目）」．⑧心の内部にある不安状態のために生ずる危ないことやばからしいことをしてみたいという傾向を測定する「衝動傾向（10項目）」．これら90項目に加え，田研式不安傾向診断検査には検証尺度（10項目）が含まれており，不備のある回答に対処できるようになっている．回答方法は，いずれの質問項目に対しても，「はい（１点）」「いいえ（０点）」の２件法である．

手続き

ホームルームなどで，クラス単位に各担任教師が検査用紙を配布し，その場で回答を得た後回収した．回答時間はおよそ10分から15分であった．

結　果

不安対象に関する性差および学年差の検討

不安対象の性差および学年差を検討するため，下位尺度別に性（２）×学年（６）の２要因分散分析を行った．また，多重比較にはRyan法（$p<.05$）を用いた．その結果を図１～図４に示した．

①学習不安傾向

性の主効果（$F_{(1,1164)}=21.99$，$p<.001$）が有意であり，女子の得点が男子よりも高かった．学年の主効果（$F_{(5,1164)}=12.55$，$p<.001$）も有意であり，中２≒中１≒中３＞小５≒小４＞小６であった．さらに，交互作用が有意であった（$F_{(5,1164)}=2.78$，$p<.05$）．性の単純主効果は，小５（$F_{(1,1164)}=10.05$，$p<.01$），小６（$F_{(1,1164)}=6.63$，$p<.05$），中１（$F_{(1,1164)}=5.93$，$p<.05$），中２（$F_{(1,1164)}=4.15$，$p<.05$），中３（$F_{(1,1164)}=7.15$，$p<.01$）が有意であり，いずれの学年においても女子の得点が男子よりも有意に高かった．学年の単純主効果は，男子（$F_{(5,1164)}=6.64$，$p<.001$），女子（$F_{(5,1164)}=8.68$，$p<.001$）ともに有意であり，男子においては中２≒中１≒小４≒中３＞小６，女子では中１≒中２≒中３＞小６≒小４であった（図１）．

②対人不安傾向

性の主効果（$F_{(1,1164)}=29.99$，$p<.001$）が有意であり，女子の得点が男子よりも高かった．学年の主効果（$F_{(5,1164)}=3.71$，$p<.01$）も有意であり，小４≒中２＞小６であった（図２）．

③孤独傾向

学年の主効果（$F_{(5,1164)}=3.68$，$p<.01$）が有意であり，小４＞小６であった．性の主効果は有意でなかった（図３）．

④自罰傾向

学年の主効果（$F_{(5,1164)}=3.08$，$p<.01$）が有意であり，小４＞中３であった．性の主効果は有意でなかった（図４）．

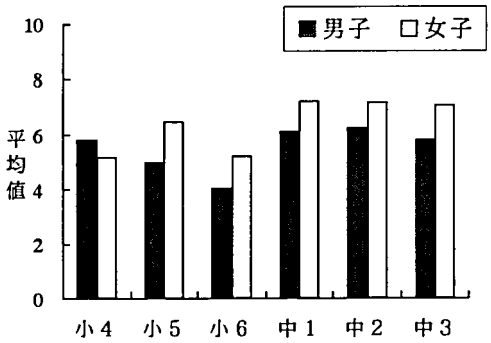

図1 学習不安傾向

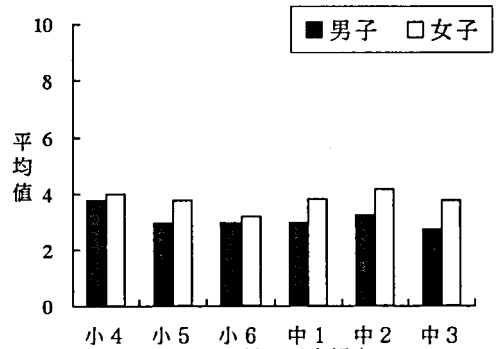

図2 対人不安傾向

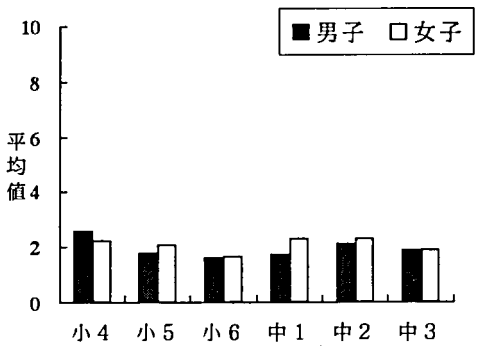

図3 孤独傾向

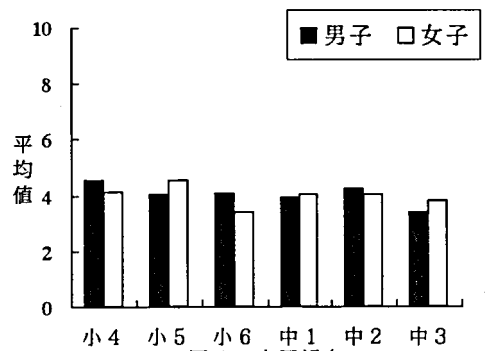

図4 自罰傾向

不安反応に関する性差および学年差の検討

不安反応の性差および学年差を検討するために，下位尺度別に性（2）×学年（6）の2要因分散分析を行った．また，多重比較にはRyan法（$p<.05$）を用いた．その結果を図5～図8に示した．

⑤過敏傾向

性の主効果（$F_{(1,1164)}=4.12$，$p<.05$）が有意であり，女子の得点が男子よりも高かった．学年の主効果（$F_{(5,1164)}=4.49$，$p<.001$）も有意であり，小4≒中1≒小5≒中2＞小6であった（図5）．

⑥身体的徴候

性の主効果（$F_{(1,1164)}=19.94$，$p<.001$）が有意であり，女子の得点が男子よりも高かった．学年の主効果（$F_{(5,1164)}=3.37$，$p<.01$）も有意であり，小4≒小5＞小6であった（図6）．

⑦恐怖傾向

性の主効果（$F_{(1,1164)}=54.96$，$p<.001$）が有意であり，女子の得点が男子よりも高かった．学年の主効果（$F_{(5,1164)}=4.64$，$p<.001$）も有意であり，小4＞中2≒中1≒中3≒小6であった（図7）．

⑧衝動傾向

性の主効果（$F_{(1,1164)}=7.74$，$p<.01$）が有意であり，女子の得点が男子よりも高かった．学年の主効果（$F_{(5,1164)}=2.94$，$p<.05$）も有意であり，小4＞小6≒中3であった．さらに，交互作用が有意であった（$F_{(5,1164)}=2.82$，$p<.05$）．性の単純主効果は，中1（$F_{(1,1164)}=9.42$，$p<.01$），中2

($F_{(1,1164)}=5.00$, $p<.05$)，中3（$F_{(1,1164)}=4.33$, $p<.05$）で有意であり，いずれの学年においても女子の得点が男子よりも高かった．学年の単純主効果は，男子において有意であった（$F_{(5,1164)}=4.05$, $p<.01$）．図8から分かるように，小4＞中1≒中2≒中3であった．

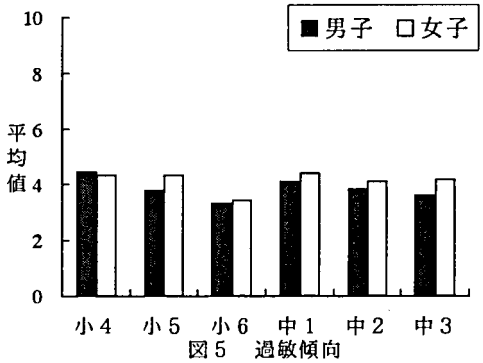

図5　過敏傾向

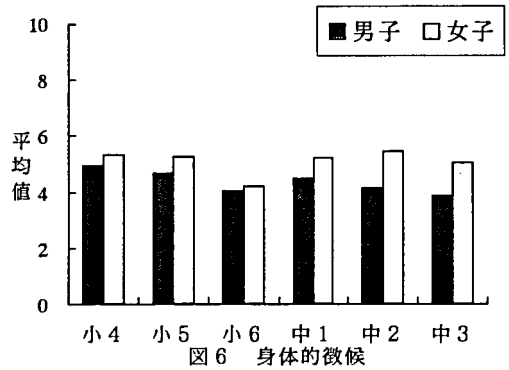

図6　身体的徴候

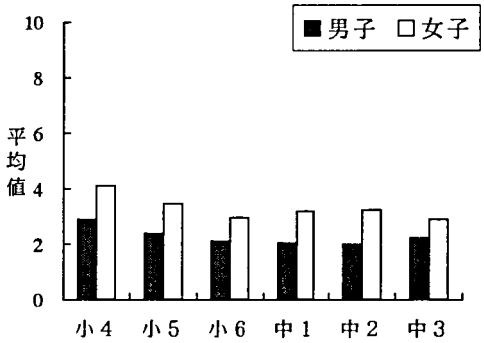

図7　恐怖傾向

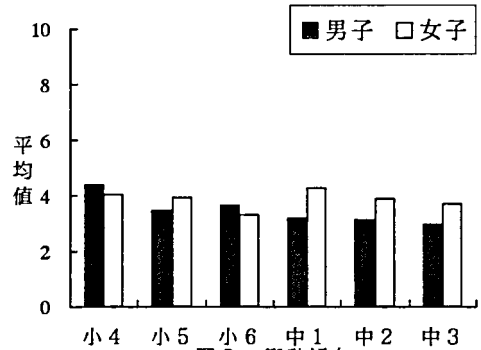

図8　衝動傾向

不安対象と不安反応の関連

不安反応に対する不安対象の影響を検討するため，学年ごと男女ごとに，不安反応に関する4つの下位尺度得点を基準変数，不安対象に関する4つの下位尺度得点を説明変数とする重回帰分析（ステップワイズ法）を行った．その結果を表1にまとめた（空欄は除外された説明変数）．すべての重相関係数が有意であり，不安対象と不安反応の間には関連があることが明らかになった．

小4男子では，すべての不安反応に対して，孤独傾向が中心となり有意で大きな影響を及ぼしていた．また，過敏傾向と自罰傾向の間，身体的徴候と対人不安傾向の間の関連が特に強かった．これに対して，小4女子は，いずれの不安反応に対しても対人不安傾向が中心となり有意で大きな影響を及ぼしていた．

小5では，男女ともに過敏傾向，身体的徴候，恐怖傾向に対して対人不安傾向が，衝動傾向に対して孤独傾向が中心となり，有意で大きな影響を及ぼしていた．

小6男子では，過敏傾向と衝動傾向に対して対人不安傾向が，身体的徴候に対して孤独傾向が中心となり，有意で大きな影響を及ぼしていた．これに対して，小6女子は，いずれの不安反応に対して

も対人不安傾向が中心となり，有意で大きな影響を及ぼしていた．また，過敏傾向と学習不安傾向の間の関連が特に強かった．

中１男子では，過敏傾向に対して学習不安傾向と対人不安傾向と自罰傾向が，身体的徴候と恐怖傾向に対して対人不安傾向が，身体的徴候と恐怖傾向に対して対人不安傾向が中心となり，有意で大きな影響を及ぼしていた．それに対して，中１女子は，過敏傾向に対して学習不安傾向と自罰傾向が，身体的徴候と衝動傾向に対して対人不安傾向が中心となり，有意で大きな影響を及ぼしていた．

表１　不安反応に影響を及ぼす不安対象の重回帰分析結果

		不安反応															
		男子								女子							
		過敏		身体		恐怖		衝動		過敏		身体		恐怖		衝動	
	学習			.20	*									.25	*		
	対人	.24	*	.33	**	.17		.28	**	.45	***	.73	***	.45	***	.59	***
小４	孤独	.31	***	.30	**	.30	**	.37	***	.25	**						
	自罰	.35	***			.24	*			.17		.13					
	R	.73	***	.68	***	.57	***	.57	***	.76	***	.81	***	.64	***	.59	***
	学習	.25	**	.18						.28	**	.18				.23	*
	対人	.45	***	.43	***	.53	***	.26	**	.50	***	.35	**	.48	***	.27	*
小５	孤独							.36	***			.26	*			.27	*
	自罰	.17															
	R	.73	***	.55	***	.53	***	.53	***	.70	***	.66	***	.48	***	.62	***
	学習	.26	**	.18	*	.18		.22	*	.36	***	.28	**	.18			
	対人	.32	***	.24	*	.24	*	.32	**	.39	***	.38	***	.37	***	.57	***
小６	孤独	.26	**	.44	***	.23	*	.27	**			.16		.15			
	自罰	.18															
	R	.76	***	.66	***	.48	***	.62	***	.66	***	.67	***	.58	***	.57	***
	学習	.41	***	.22	*			.22	*	.28	***	.15				.14	
	対人	.27	***	.30	**	.30	**	.22	*	.21	*	.33	***	.16		.30	**
中１	孤独							.28	**	.16	*	.27	**	.26	**	.22	*
	自罰	.26	***	.14		.20	*			.30	***	.15		.27	**	.18	*
	R	.74	***	.52	***	.42	***	.54	***	.73	***	.69	***	.54	***	.65	***
	学習			.30	***					.43	***	.36	***	.21		.24	*
	対人	.22	*	.36	***							.17					
中２	孤独	.16		.18	*	.30	**	.15		.24	**	.25	**	.16			
	自罰	.41	***			.15		.37	***	.24	*	.16		.23	*	.31	**
	R	.64	***	.61	***	.36	***	.42	***	.70	***	.71	***	.47	***	.49	***
	学習	.31	**	.20		.22	*	.34	***	.18	*						
	対人	.15		.25	*			.27	*	.43	***	.49	***	.28	*	.45	***
中３	孤独			.24	*			.15		.25	*	.16					
	自罰	.31	**									.16		.25	*		
	R	.61	***	.52	***	.22	*	.59	***	.71	***	.70	***	.46	***	.45	***

1) * p <.05，** p <.01，*** p <.001.

2) 数値は標準偏回帰係数を表す．

3) Rは重相関係数を表す．

中２男子では，過敏傾向と衝動傾向に対して自罰傾向が，身体的徴候に対して学習不安傾向と対人不安傾向が，恐怖傾向に対して孤独傾向が中心となり，有意で大きな影響を及ぼしていた．それに対して，中２女子は，過敏傾向と身体的徴候に対して学習不安傾向が中心となって，有意で大きな影響を及ぼしていた．また，衝動傾向と自罰傾向の間の関連が特に強かった．

最後に，中３男子では，過敏傾向に対して学習不安傾向と自罰傾向が，衝動傾向に対して学習不安傾向が中心となって，有意で大きな影響を及ぼしていた．それに対して，中３女子は，いずれの不安反応に対しても対人不安傾向が中心となり有意で大きな影響を及ぼしていた．

考　察

不安対象と不安反応の性差および学年差

不安対象と不安反応の性差および学年差について検討するために，下位尺度別に２要因分散分析を行った．その結果，学習不安傾向，対人不安傾向，過敏傾向，身体的徴候，恐怖傾向，衝動傾向において有意な性差が見られ，いずれも女子が男子よりも高い不安傾向を示した．また，すべての下位尺度において，有意な学年差が見られた．すなわち，不安傾向の学年による推移は，小４から小６にかけて低下し，中１と中２で上昇した後，中３で再び低下するというものであった．本研究の性差に関する結果は，田研式不安傾向診断検査を用いて中学生の不安傾向について検討した藤岡・稲岡（1986）の研究で得られた結果とほぼ一致するものであった．しかし，学年差については違いが見られ，藤岡・稲岡（1986）の研究では中1から中３にかけて，学年の進行とともに不安傾向は高まっていたが，本研究では中３で低下していた．また，本研究における不安傾向の結果と，昭和34年と昭和58，59年の子どもの不安傾向のデータを比較検討した松尾（1984）の結果とを比べてみると，本研究の結果は昭和58，59年より高い不安傾向を見せた昭和34年の結果の方により近いものであった．さらに，学年別に見ると，中学生の不安傾向に年代による大きな変化は見られなかったものの，小学生の不安傾向は昭和58，59年に比べて非常に高く，昭和34年の結果に近いものになっていた．不安は，その時代の影響を受けやすく，子どもの将来への展望の欠如や行動の攻撃的傾向など（松尾，1984）との関連が示唆されていることから，現代の子どもは将来に対して先行きの見えない状況に置かれているのかもしれない．したがって，不適応行動を子どもの不安傾向の視点から解明しようとするならば，時代背景など時系列的な視点も必要であることが示唆される．

以下に，主な結果について考察していく．

まず，不安対象について考察する．有意な性差は，学習不安傾向と対人不安傾向で見られ，いずれも女子が男子よりも高い不安傾向を示した．子どものストレスに関する研究においても，女子は学業や対人関係（教師との関係，家族，友人関係）に関する出来事をストレッサーとしてより高く評価すること（高倉・城間・秋坂・新屋・崎原，1998），情動的ストレス反応の１つである「抑うつ・不安」を表出しやすいのは女子であること（嶋田・戸ヶ崎・坂野，1994）が報告されている．本研究の結果はこれらの結果と一致する方向を示している．不安対象の学年差については，学習不安傾向において顕著に見られ，中学生が小学生よりも高い不安傾向を示した．この結果は，中学に入ると，受験体制

に置かれ学習量や難易度が増し，より高いストレスにさらされるためであると考えられる．岡安・嶋田・丹波・森・矢富（1992）の研究においても，学年が上がるほど学業に関する出来事をストレッサーとして高く評価するという結果が得られている． 孤独傾向と自罰傾向においては有意な性差は見られず，学年差もほとんど認められなかった．したがって，孤独傾向と自罰傾向は，年齢による変動や性別による違いよりも，ある個人の傾向として見られる不安の問題であるのかもしれない．

次に，不安反応について考察する．有意な性差は，すべての不安反応で見られ，いずれも女子が男子よりも高い不安傾向を示した．このような結果は，女子の過敏傾向の高さによるものであると考えられる．なぜならば，過敏傾向は，感受性が強すぎて，些細なことまで気になり，行動が著しく阻害される傾向のことであり，一般的には神経質として認識されている．また，この不安傾向が高いと，あらゆる場面で不安を感じやすくなる（田中教育研究所，1958）といわれているからである．したがって，過敏傾向を高く示した女子は，他の不安傾向にも高く反応する可能性があると考えられる．また，衝動傾向については，女子の方が自己の感情のコントロールに困難さを抱いているという結果が得られた．一般的には，男子が女子よりも衝動的で攻撃的であると考えられているが，この下位尺度は，「急に泣きたくなる」「大声を出したくなる」「いらいらして，じっとしていられない」といった攻撃性だけでなく，さまざまな感情の起伏の激しさを示すような項目から構成されているため，このような結果になったものと考えられる．不安反応の学年差については，すべての不安反応において，小４の不安傾向が最も高く，小６が最も低いことが共通していた．恐怖傾向については，先行研究（田中教育研究所，1958）と同様，加齢とともに低下することが明らかになった．ただし，恐怖傾向は，「高いところに登るのは，とても怖いですか」「夜，一人で寝るのは心配ですか」「雷が鳴ると，とても怖いですか」など，年齢の低い子どもが恐れを感じると思われるような項目で構成されている．本研究の結果は，こうした質問項目の内容が強く反映されて得られたものであると考えられる．

不安対象と不安反応の関連

対人不安傾向は，他の不安対象に比べて，不安反応に対する標準偏回帰係数が最も大きかった．また，その影響は多くの不安反応に及ぼしていた．このことから，この時期の子どもたちの心理的適応にとって，対人関係での不安が重要な役割を担っていることが分かる．また，孤独傾向も不安反応に対する標準偏回帰係数が大きかった．人を避けようとする欲求と仲間として認められたい欲求の葛藤から生じる孤独傾向は過敏傾向，身体的徴候，恐怖傾向，衝動傾向といった多様な不安反応を引き起こすことが明らかになった．男女ともに孤独傾向を低く示したにも関わらず，多くの不安反応に影響を及ぼしていたことから，孤独傾向の量的な側面だけでなく，質的な側面への検討も必要であると考えられる．他方，不安反応に対する学習不安傾向の標準偏回帰係数は比較的小さく，不安反応への影響も少なかった．これは，学習に対する不安は多かれ少なかれ，就学年齢である子どもであれば共通してもっており，何かしらの対処行動が取られているために，さまざまな不安反応として表れるに至らなかったためと推測される．

まとめと今後の課題

本研究では，子どもの不安傾向を発達的に検討した．その結果，不安傾向の所在や関連には，学年や性別によって違いがあることが明らかになった．そこで，不安が不適応行動と関連していると思われるいくつかの考察を展開した．今後は，子どもの進学希望や通塾，いじめ経験の有無，親の仕事やきょうだいなどの家庭環境といった要因と不安傾向の関連について研究する必要があると思われる．

引 用 文 献

藤岡千秋・稲岡弘子　1986　中学生の不安傾向に関する検討（1）　大阪教育大学紀要第Ⅴ部門第35巻第1号，109-119．

松尾祐作　1984　児童期・青年期における不安傾向　福岡教育大学紀要第34号第4分冊，153-158．

岡田佳子　2000　中学生の学校ストレスに関する研究（2）－構造方程式モデルによる二次的反応の生起に関する分析－　日本教育心理学第42回総会発表論文集，258．

岡安孝弘・嶋田洋徳・丹波洋子・森　俊夫・矢富直美　1992　中学生の学校ストレッサーの評価とストレス反応との関係　心理学研究，**63**，310-318．

嶋田洋徳・戸ヶ崎泰子・坂野雄二　1994　小学生用ストレス反応尺度の開発　健康心理学研究，**7**，(2)，46-58．

神藤貴昭・伊藤崇達・斉藤誠一・柳原利佳子・久木山健一・西田裕紀子・奥田　剛　1999　現代中学生の不適応に関する基礎的研究(2)－生活ストレス－　日本心理学会第64回大会発表論文集，887．

総務庁青少年対策本部編　2001　青少年白書　大蔵省印刷局

高倉　実・城間　亮・秋坂真央・新屋信雄・崎原盛造　1998　思春期用日常生活ストレッサー尺度の試作　学校保健研究，**40**，29-40．

田中教育研究所編　1958　田研式不安傾向診断検査手引　日本文化科学社

付記

本研究にご協力いただいた小学校・中学校の先生方や児童・生徒の皆様に対して心から御礼申し上げます．また，本論文作成にあたり，御指導頂きました諸先生方ならびに諸先輩方にも重ねて御礼申し上げます．

（指導教官：前田健一）